俺の名は久世ヒロキ
両親共々海外赴任のため
絶賛一人暮らし満喫中の高校生だ。
学校に通いつつ、
ちゃんと自分で家事をしたり自炊したりと
実に高校生らしく真面目な生活をしている。

…これで可愛い彼女でもいれば
さらに充実した生活なんだがなぁ…
今日も今日とてネット画像をオカズに
右手が恋人の寂しい夜をすごしている。
まぁ一人暮らしの何がいいって、
こういう時間を邪魔されないってことだけど。

＊体験版のサイズは600× 830と少し小さめになっています。
（製品版のサイズは1200× 1660です）

…もうこんな時間か。
さて、そろそろ寝るかな…
「ピンポーン」
ん？
チャイムが鳴る。
おいおい、
今何時だと思ってるんだよ。
「ピンポーンピンポーン」
うるせえなぁ…
「ピンポーン」
どうせ一人暮らしの学生を狙った
新聞かセールスの類…
居留守決め込んでれば
そのうち諦めるだろ…

「ピンポンピンポンピンポン」

あ――――！

しつこい――！

「いい加減に……！」

ガチャッ

ドアの前に立っていたのは
ブカブカのコートを羽織り、フードを目深にかぶった小柄な…
女…？

どう見ても新聞屋ではない。セールス…でもない。
しかし俺は自慢じゃないが女の友達はひとりもいないぞ。
彼女いない歴＝年齢の、悲しきDT野郎だ。
ひょっとしてお隣さん…とも考えたが、
確か隣はまだ入居していないはず。
引っ越ししてきた気配もない。
じゃあこいつはいったい…

「えーっと、どちらさん…？」
女はちらっと俺のことを見て顔を確認すると、
「ヒロキ…」
俺の名を呼び、目深にかぶっていたフードを外し、顔を見せる。

あ…
か、カワイイ…
正直めっちゃ好みだ。
あれ？
今コイツ、俺の名前を…
「ヒロキ、俺だよ俺。分かるか？」
え？
誰って？
こんな知り合いなんかいないよな？
「お前の友達のカズキだよ。」

え？　友達？
俺に友達？　女の？
「カズキチハル。
香る月と書いて香月。香月千春」
「カズキ…チハル…」
「そう！そうだよ香月だよ！」
カズ…キ…？

確かにカズキという名の友達はいる。
同じクラスでお互い趣味も合い、
彼女いない者同士でよく一緒に遊びに行ったりもしている。
気兼ねなく何でも話せる数少ない俺の友達だ。
しかし。
しかし、
あいつは男だぞ？
妹…？
いや、あいつは一人っ子のはず…

「でも、俺の知ってるカズキは」
「お前の言いたいことは分かってる！
確かに外見がちょっと変わっちまってるけど、
でも俺はカズキなんだよ！」
カズキ…？　こいつが…？
「チハルっていう女の子みたいな名前が嫌で、
名字でしか呼ばせない、あのカズキ？」
「そう！」

「チハルちゃん♡って呼ぶとブチ切れて延髄蹴りかましてくる、あの？」
！

「俺をその名で
呼ぶなあああああーーー」

ドゴオオオオ！

次の瞬間、
綺麗な延髄蹴りが俺に炸裂し、吹っ飛ぶ俺

「ハッ、この切れのある蹴り！お前もしかして本当に」
「そうだよカズキだよ！」

とりあえず玄関先で話すのも何なので、
カズキと名乗るそいつを部屋に入れる。
ブカブカのコートを脱ぐと、
これまたブカブカのTシャツ。
さっきの蹴りは確かにカズキのものだったが、
本当にコイツがあのカズキ…？

あ、でも…
コイツが着てたコート。
見覚えがあるぞ。
カズキのと同じコートだ…
ポットのお湯でコーヒーを入れながら考える。
だとすると。
いったいコイツに何が起きたんだ？

「ほら、これでも飲めよ。あったまるぞ。」
「サンキュ。助かるぜ。」
コーヒーカップを両手で持ち、
美味しそうに飲むTシャツ姿の女の子。
ブカブカのTシャツがずり落ちて
スベスベの肩が半分見えている。
そしてTシャツから伸びている素足。
合うズボンがなかったのだろうか。
小さな体、細い手足、長い髪。
うーん。
どこからどう見ても女の子だ。
「あ～うめえ～生き返る～」
コーヒーを飲んでリラックスしたカズキ(?)は、
すっかりリラックスしたようで、
足をブラブラさせている。
その仕草もどこからどう見ても女の子で。
やっぱり目の前のコイツがカズキだなんて
どうにも信じられない。

…ひょっとしてカズキの奴、
女友達を使って俺を騙そうと…？
んなワケないよなぁ。
コイツにそんな女友達がいたら
真っ先に俺に自慢しているはずだし。
困惑している俺に気づいたのか、
カズキは飲み終えたコーヒーカップを置き、
俺の方に向き直る。
「やっぱ信じて貰えないよなぁ」
「信じたいのは山々なんだが…
何か証拠があればなぁ…」
「誕生日は5月3日、血液型はO型、
足のサイズは26」
「そんなの調べれば分かることだし…
あ、そうだ」
俺は思い出した。
確かコイツの体には…

「ちょっとパンツ脱いでみろよ」
「へっ！？」
「だからパンツ脱いでアソコ見せてみろよ」
「えっ、お前いきなり何を」

「そうじゃなくて。
昔一緒に銭湯に行ったことあったろ？
そん時に
お前のチンコの横にホクロあったの思い出してさ。
しかも二つ並んだヤツ。」
「あれは結構珍しいぞ。
お前がカズキ本人だって言うなら
同じ位置にホクロがあるはず。」
「ホクロ…チンコの横に…」
「うーん…
分かった、ちょっと待ってろ」
ゴソゴソとTシャツをめくり、
パンツ…
男物のトランクスを下ろすカズキ。

「チンコが無い」
初めて生で見る女のアソコに
ドキドキしながら確認する俺。
「そりゃまぁ…無いだろうけど…」
「しかもツルツルだ！」
「うるせえ！
女になったら体毛も薄くなってたんだよ！
いいから早く確認しやがれ！」
「そうか、そうだったな」
あらためてじっくり目視する俺。
そこには…
ホクロがあった。
同じ位置に二つ並んで。

「…あるな…同じところに同じホクロが」
「うむ」
「ということは…
本当にお前、カズキなのか…？」
「ああ」
「でもチンコ無かったぞ！？
マジで女だぞ！？」
「そのことなんだが…」
「話せば長くなる」

「お前も知っていると思うが、俺の趣味は魔法書集めでな」
「いや初耳なんだが」
「特に悪魔召喚の書物が大好物で」
「大好物ってお前」

「ある日、本を集めるだけで物足りなくなって
実際に悪魔召喚を試そうと思って」
「待て待て」

「ところが召喚の材料がどうしても一つ足りなくてな」
「材料というと」
「『処女の生き血』なんだが、それがどうしても手に入らなくて」
「それは…
確かに入手しにくいな」

ラーむ…

「似たようなもんだし、『童貞の生き血』でも何とかなるかなって」
「それは…ダメだろう…」
おお！
ホワワン
「でも呼べたんだよ、『童貞の生き血』で。悪魔が。」
「マジかよ！」

「でも召喚された直後にそいつが盛大にゲロ吐いて」
「同情を禁じえない」
ゲロオオオオ

「そんで滅茶苦茶怒られて呪われた」
「自業自得と言うべきか」

「今からお前を女の体にするから、その血で口直しさせろって言われて」
「よく生きてたな」

「うーん…まぁ大体事情は分かったよ」
「分かってくれたか！」
「女になったのは呪いのせいだとして…それを戻す方法はあるのか？」
「うん…まぁ…あるといえばあるんだが…」
「じゃあそれを試せばいいだけなんだろ？」
「それが…だな…」
「難しいのか？　特別な材料がいるとか」
「難しいといえば難しいような…」
（？）
「悪魔が言うには…その…セ…セ…ックスを…」
「セ…？」

「男とセックスして…受精したら戻してやるって…」
「…」
「…」

「セックス」
「そう
セックス」
「さらにしゅせいって
つまり…その…」
「子作りを…しろと…？」
「ま…
まぁそういうこと…かな…」
「しかし
なんでそんな」
「どうやら俺が呼び出したのは
愛欲の悪魔ってヤツらしいんだ。
それで悪魔が欲しがってるのが
性とか情欲とかそういうヤツらしくて」

「それで…
つまり俺の所に来たってことは
お前まさか…」
「ヒロキ」
真剣な顔で俺の方に向き直るカズキ。
（ゴクリ）

「頼む！
俺とセックスしてくれ！！」

「いやいやいや待て待て待て」
「頼むよ！　俺を助けると思って」
「しかしだな、セックスって言うのは
好きな者どうしでやる愛の営みで」
「知ってるよ」
「しかも受精って赤ちゃんを作るって
ことじゃねえか。
俺、高校生でパパになるのはちょっと」
「それは受精した時点で男に戻るから
大丈夫だって…たぶん」
「でも何で俺と」
「だって知らない奴となんか
やりたくないし！」
「うーん、まぁ確かにそれはなぁ」
「それに…お前だったら…
助けてくれるかなって…」
「…」

「こんなこと親にも言えないし…
頼れる奴、お前しかいなくて…」
「そりゃ…助けてやりたいけど…
でもなぁ…」
「…無理か…？」
「俺…童貞だし…初めてがこんなのって…」
「大丈夫、俺も初めてだから」
「そういうんじゃなくてさぁ…
俺だって初めては可愛い女の子と
甘ーいムードで…とか…
夢っていうか、色々理想があってだな…」
「そっか…そうだよな…
確かに初めてが俺となんて嫌だよな…」

ガッカリした表情で下を向いているカズキを見て、
「（あれ？）」
俺は気付いてしまった。
「（嫌かどうかで言うと…嫌じゃ…ないぞ）」
中身がカズキだということを省けば普通に俺好みの外見だ。
いや、非常に俺好みの外見だ。
そういう女の子が、だぞ、
「セックスして！」ってお願いしてくるなんて…
あれ？　断る理由なんて…

「無理言って悪かったな。
しょうがない、
どっかそこらへんで
知らないオッサンでも捕まえて――」
「よし」
「セックスしよう」
ガシッとカズキの肩を掴む俺。
驚きの表情で俺の顔を見つめるカズキ。
「え、だって今、お前」
「困っている友人を助けないなんて
そんなの男じゃない！」
「セックスしよう！」
「う…うん…？」

「た、助かるけど…いいのか？
その…初めてが俺で」
「相手がお前ならノーカンだ。」
「それにお前も初めてってことなら、
つまり処女ってことだ。
初めて同士なら
たとえ失敗してもお互いさまだし、
恥ずかしくない！」
「な、なるほど…？？」
「ただし条件がある」
「な、なんだ…？」

「チハルって呼ばせてくれ」
「…！！」
「その名前は嫌いだって知ってるだろ！」
「女の子みたいだから、だろ。
いいじゃないか、今は女の子なんだから」
「しかし」
「たとえセックスに持ちこめても
カズキって呼ぶと萎えそうなんだよ。
なあ頼むよ」
「…しょ、しょうがない…」

「チハル」
「うっ」
「チハルちゃん」
「ぐぬぬ…」
「チハルちゃん可愛い♡」
「うがががが」
真っ赤な顔で睨んでくるけど
可愛い顔のせいで
まるで凄みがない
怒っているのか
照れているのかよく分からないぞ。
「チハル」
「くううううう」

「オッパイ見せてくれ」
「へ？」

「ダ、ダイレクトに来たな」
「そりゃあなぁ…セックスするんだったらまずはオッパイだろ」
《キリッ》
「いや、そんなキリっとした表情で言われても…まぁ…いいけど…」

「ちょ、ちょっと待ってろよ」
ゴソゴソ…

Tシャツの下は…黒いタンクトップか。
…服の上からでも大きさが分かるな。
…これは…
ゴクリ。
やべえ。
大きな音を立てて生唾飲んじまった。
…聞かれたかな？

あー、やっぱり聞こえたか。
ジト目でニヤニヤされる。
ハイハイ、エッチですとも。
男はすべからく皆スケベなのだ。
「…スケベ」

「しょうがないだろ女に縁がないんだから。
お前のオッパイとはいえ
期待せずにはいられないんだよ」
「まぁ分かるけど」
「いいから早く見せろよ」
恥ずかしさを誤魔化しながら急かす俺。

「ど、どうだ。ぬ…脱いだぞ」
「お、おう…」
「…」
「こ…これが女のオッパイ…」
自慢じゃないが
実物の女の裸を見るのは初めてだ。
しかもこんな至近距離で。
柔らかそうな白い肌。
盛り上がった膨らみの中心に
ピンク色の、ち、ち、乳首が…
やべえ、目が離せない。
中身がカズキと分かっていても興奮する。
しかも何かいい匂いがするし。
これ、オッパイの匂いなのか？
オッパイから漂ってくるのか？
ドキドキしてきた。

「あ、あんまりジロジロ見るなよ」
「だ、だって見ちゃうだろ、普通に。
童貞だぞ。初めて見るんだぞ。
ジロジロ見るなっつっても無理だって」
「そりゃそうなんだけどさー…」
「そんな真剣な目で見られると
恥ずかしいっていうか…
ムズムズするっていうか…」
そう言って苦笑いしながら、
照れているのだろうか、顔が真っ赤に染まっている。

そんなカズキを見て不覚にも可愛いと思ってしまった。
くっそー
カズキのくせに！カズキのくせに！
可愛いとは何事だ！
だがそんなことよりも今はオッパイだ！
写真やネットでしか見たことがないが、
今まで見たどんなオッパイよりも…

「キレイだな」
「へっ？」
「キレイなオッパイだ」
「そ、そうか…？
あ、ありがとう…」
カズキは嬉しいというよりも
余計に恥ずかしくなってる表情だ。
…オッパイってあんまり褒めるものでも
ないのかな…？
しかし本当に柔らかそうだな…
触って確かめてみたくなるぞ。

「な、なぁ。」
「ん？」
「触ってもいいか？」
「えっ」
「えっ、じゃないだろ。
呪いを解くためにエッチするんなら
触って当然だろ。
まずはその一段階目だろ」
「ま、まぁそうなんだけどさ…」
「呪い、解かないのか？」
「解く！　解くよ！」
「じゃあ触るぞ」
「う…うん…」

「お、おお…」
柔らかい…
たとえるならマシュマロだろうか。
とにかく柔らかい。指が沈み込んでいきそうなくらい柔らかい。
「これがオッパイ…やわらけえ…すげえやわらけえ…」
もにゅ♥
「は、鼻息荒すぎ…」
「しょうがねえだろ
男ならオッパイに興奮するのは当然」
「童貞だしな」
「童貞言うな」
軽口を叩く奴はこうだ

乳首を軽くつねってやる。
びくん！
「ひやうん！」
コリッ

「あ、わりい痛かったか？」
「あ、や、痛くは…なかった…けど…」
痛くはなかったのか。
なら…

コリコリコリ
「あっ、ちょ、んんっ」
乳首を中心にコリコリ弄ると
ビクビクしながら声をあげる。
ははーん、これがいわゆる性感帯ってやつか。
ビクッビクッ
コリコリ
あ、
んッ
きゅうん♥
そして弄っているうちに固く、とがっていく乳首。
ああ、くそ、ムラムラしてきた。
(しゃぶりたい)
そんな衝動が俺を突き動かした。
ビクン♥

ドサッ
「えっ、何…」
ベッドに押し倒し、
驚いているカズキをよそ目に
その無防備な乳房にしゃぶりつく。

ジュルジュルと舐め、吸い付き、歯で、舌で、乳首を弄び、
反対側の乳房も片手でグニグニと揉みしだく。
「オッパイ…そんなされたら…
あっ、あっ、まっ、待て、待てってば、…あっ」
ビクビク
ビクン
面白いぐらいに反応するカズキ。
声を上げて
ビクビクと腰が跳ねている。

（胸を攻めているのになんで腰が反応するんだろう）
ふとした疑問が頭をよぎり、
乳房を揉んでいるのとは別の手を股間に滑り込ませる。

「ーっ…ふぁ…」

ビクッ

「…ヌルヌルだ」
思いがけない感触に胸にうずめていた顔をあげ、俺はカズキの顔を見る。
真っ赤な顔で涙目になっている顔が、俺と目が合うとますます赤くなる。
ヌポッ

「これ、濡れてるってことなんだよな？」
「う…うう…」
「オッパイ舐められて感じてたんだ」
「まさか、胸がこんなに感じるなんて思って、なくて」
女の体ってそういうふうに出来ているものなのか。
それともこいつが感じやすいのか。
こうなったらついでだ。
頼んでみよう。
「アソコも…見ていいか？」
「…！　アソコって」

「アソコっつったらアソコだよ。マンコだよ。生殖器だよ。」
「え、でも、え、マジで」
「見ないとセックスできないだろうが。
第一どこに入れるかも
わかんねえんだぞ、俺は。」
「え…それはそうかもしれないけど…」
なんだコイツ。
セックスしようって言ってきたのはそっちなのに
なんで今更躊躇してるんだ？
「呪いが解けなくて困るのはお前だろ？
協力的にならないと俺も困るんだが。」
「…わ、分かったよ」

ご覧頂きありがとうございました。
体験版は以上になります。
続きは製品版でお楽しみください。
女体化した親友の
呪いを解くため
Hすることになった
俺の話